

映画を哲学する

竹 原 弘

「ジュラシック・パーク」—主体と客体の逆転劇

(1) 「ジュラシック・パーク」とフーコー

スピルバーグ監督の代表作の一つである「ジュラシック・パーク」は、恐竜のクローン化によって、恐竜を再生させて、南洋の孤島にテーマパークを建設し、それが崩壊するというパニック映画である。絶滅したはずの恐竜を再生させることは、現代世界の中に有史以前の世界を甦らせることであり、そのことが実現可能であるかどうかは別にして、世界の秩序を大きく変容させることである。そのことはどのような意味があるかについて、フーコーの代表作である『言葉と物』を手掛かりにして分析する。

ミシェル・フーコーは『言葉と物』の中で、言葉と物との関係を大きく三つの時代に分けて述べる。まずルネサンスの時代では、言葉と物は一体であり、言葉は物を指示し、指示されるという関係には至っておらず、言葉は物と一体となって世界を秩序付けていた。それがフーコーのいう古典時代においては、言葉と物とは分離して、指示し、指示される関係へとその関係性を変容させていった。フーコーはその例としてセルバンテスの『ドン・キホーテ』を挙げる。ドン・キホーテは、彼が耽読していた騎士道の小説を現実の世界へと反映させることによって、ルネサンスの時代の言葉と物が一体であった時代を生きようとするが、その良き時代は既に過去のものとなっていたが故に、彼は言葉と物との関係性を見誤り、失敗を重ねる。

そして近代に至って、主体としての人間が登場する。つまりフーコーに依れ

ば、主体として人間は近代の産物であり、それはやがて終焉を迎える。

このように大まかにフーコーの『言葉と物』について述べたが、それがどのような形で、この「ジュラシック・パーク」と関係するののかについて、以下述べることにする。

(2) 恐竜の化石段階

勿論、フーコーが扱っているルネサンスから近代に至る時代における人間の思考形態の分析を、現代という時代に限定されるこのSF映画にそのまま当てはめることはしないし、出来るはずもない。我々はあくまでフーコーの『言葉と物』という、もう古典になりつつあるこの著書を手掛かりにして、恐竜と人間との関係、あるいは人間と世界との関係について考えることを試みる。

この映画は大きく三段階に分けることが出来る。まず、人間が化石としての恐竜にのみ関わっている段階、これは現実の世界では現在もそうであるが、それを「化石段階」と呼ぶことにする。それから、実業家ハモンドの努力によって恐竜が復活した段階、これ「パーク段階」と呼ぶことにする。最後にパークの秩序が崩壊して、恐竜が人間を襲う段階を「主客転倒段階」と呼ぶ。これら三つの段階はフーコーの『言葉と物』の三つの時代に対応している訳ではない。あくまでもフーコーが扱った三つの時代の思考形態を手掛かりにして、それぞれの段階を分析することを試みるのが、本稿の目的である。

まず人間が化石としての恐竜にのみ関わっていた段階、つまり「化石段階」についてであるが、この段階を『言葉と物』におけるルネサンスに類似する段階と考える。化石としての恐竜は、人間にとって一種の記号である。化石は恐竜の痕跡であり、それは人間に対して積極的に関わることはしない。ただその痕跡が人間に対して何らかのメッセージを送っているだけである。化石は、従ってあるしるしであり、それはそれを解釈しようとする人間にとって記号である。学者は化石から恐竜についての何かを読みとる努力をすることによって、恐竜がかつて有していた諸々の特徴を知ろうとする。

化石とそれに付いている記号とは一体のものである。化石それ自身は、人間に対して（古生物学者に対して）何らかのメッセージを送る。それは恐竜という太古の時代に地球を闊歩していた生き物が現代に残した唯一のメッセージであり、自らがかつて存在していたことを人間に伝達する唯一の方法である。そして古生物学者は化石が語るそれらのメッセージを記号へと翻訳することによって、太古の時代からのメッセージを解読する努力をする。すなわち、化石と記号とは一体のものであり、両者を分離することは出来ない。つまり人間にとって物としての化石と記号としての言葉とは一つのものであり、それらは同一の事柄を人間に伝えている。記号は化石に内在しており、あるいは化石そのものが記号である。

「記号に語らせてその意味を発見することを可能にする知識と技術の総体を解釈学と呼び、記号がどこにあるかを見わけ、それらを記号として成り立たせているものを規定し、記号同士のつながりと連鎖の法則との認識を可能にする知識と技術の総体を、記号学と呼ぶことにしよう。16世紀は、解釈学と記号学を相似という形式のなかで重ねあわせていた。」（渡辺一民 佐々木明 訳 『言葉と物』）

そのようにして化石が語るメッセージを読みとることによって、古生物学者は諸々の恐竜を分類して、生物というカテゴリーの中に位置付ける。化石の解読によって読みとられた言葉、つまり化石が意味することに基づいて形成された一連の言葉の連鎖によって諸々の恐竜は分類される。そしてそのように分類された恐竜は、相互間の差異によってさらに細かく分類される。分類された恐竜は古生物の中に付け加えられて、人間の研究や博物館への客の眼に晒され、彼等の鑑賞の対象になる。そして映画にも出て来た恐竜好きの少年の興味を引くようになる。恐竜好きの少年達は、恐竜の化石に基づいて描かれた恐竜の想像図や化石を通して、恐竜に想像の世界で出会うことになる。そのことは少年達が言葉を通して太古の世界を、彼等が現在存在している世界で想像することを意味する。化石という太古の世界からのメッセージに基づいて分類された恐竜は、その分類によって世界の一部となり、少年達が太古の世界を想像する手

助けとなる。そのように構成された太古の世界、あるいは恐竜は、言葉によって構成されたものであり、それ故に恐竜や太古の世界は即言葉であるといえる。化石と、それから読みとるメッセージとは一体のものであり、それ故に化石と言葉とは一体であるということは既に述べた。そうした化石に基づいて構成された太古の世界や恐竜の分類も、それ故に言葉によって構成されているが故に、当然言葉と一体である。そしてそれらの言葉は、言葉とは別のもの、例えば世界の中に存在する何かを指示することはなく、言葉が言葉を指示することによって言葉のみによって造られた実在しない世界を描く。その空虚な世界、かつては存在したであろうが、現在は実在しない空虚な世界は、現実の世界の中に組み込まれるが、現実の世界を排除して、自らが現実の世界の中に何らかの場を占めることはなく、「自然それ自体が、語と標識との、物語と文字との、切れ目のない織物をなしている」(同書)のである。言葉が作り出すそうした非実在的な想像された世界は、現実の世界を排除することなく、現実の世界を構成している切れ目のない織物を作っている。恐竜が存在していたジュラ紀や白亜紀という太古の世界は、恐竜好きで空想好きの少年達にとっては、空想的世界や幻想的世界と同じように、冒険に満ちた胸躍らせる世界であり、太古の世界はそうした世界と共に織物をなしている。

現実の世界はジュラ紀や白亜紀という世界、あるいはそれらの時代に存在していた恐竜に何事かを語らせることによって、世界をより豊かにする。つまり世界は現実的な事柄のみによって構成されているのではなくて、非現実的な世界をもその中に含んでいることを、言葉を通して自らが語る。それらについての言葉は、それ故に世界と一体であり、世界という織物を共に編んでいる。

例えばテレビでニュースを報道するアンウンサーは、主体的に語っているのではなくて、世界という織物によって語らされている。何故ならば、アナウンサーが語る事柄はその日に世界で起きた何らかの事件であり、それについてのアンウンサーの言説はアンウンサーの主体的な言葉ではなくて、その出来事をも一つの事実として作り上げている世界によって織られた言説なのである。つまりアンウンサーの口から出る言説は世界の中で生じた一つの出来事によって織

られた言説に他ならない。そしてその言説もアンウンサーの口から出ることによって世界の中に組み込まれて行く。

それと同様、恐竜について、またはジュラ紀や白亜紀について語るのとは世界であり、個々の人間ではない。つまり主体としての人間が語るのではなく、恐竜についての様々な事象を蓄積している世界が人間に語らせるのである。個々の人間はまだ化石としての恐竜に対して主体としての意味を有してはいない。個々の人間が恐竜について、またはそれらが存在していたジュラ紀や白亜紀について語る場合に、自らが恐竜に対する主体として語るのではない。恐竜やその時代は世界という織物を構成することによって、世界と一体なのであり、そこに主体としての人間が入り込む余地はない。つまり恐竜についての様々な言説は、アナウンサーが語る言説と同様に、世界の構成要素として世界と一体なのであり、世界の中に組み込まれている人間はそれらに対して主体ではなく、世界という様々な要素によって織られている全体の一部でしかない。そうした人間は恐竜について、主体として語るのではなくて、世界によって強要されて語るのである。それ故に人間が恐竜について語る際に、語る主体は世界であり、人間ではない。確かに人間が自分の口を開けて言葉を発するのだが、世界と一体である恐竜について語るのとは、世界である。世界が人間の口を借りて語るのである。

それと同様に、最早存在しない恐竜について語るということは、恐竜の痕跡を残している世界が人間に語らせるということである。

人間は世界と一体である恐竜について、それに面することによって感じた恐怖や好奇心を語ることは出来ない。人間が面しているのは、言葉を媒介して世界の中に組み込まれた恐竜であり、この映画に出て来るような、生きた恐竜、人間を襲って、それを食料にしようとする恐竜ではない。だから恐竜に対する主体としての自分を介して経験した、生きた恐竜、人間を襲う恐竜の恐怖について語ることは出来ない。化石の読解を通して語る恐竜は、世界と一体となった恐竜であり、だから人間はそれらに対する主体ではない。語と語を結びつけて、恐竜についての言葉を形成するのは人間ではなくて、世界である。各々の

(158)

語は、世界と一体になっている化石からの恐竜についてのメッセージに基づいて相互に結合されるが故に、それらを相互に結合させるのは世界である。人間はそれらの語が入り込んでいる世界の指示によって、世界と一体となっている恐竜についてのメッセージに基づいて、言葉を形成するのである。そのことは先に挙げたテレビのアンウンサーの言説が世界によって形成されるのと同様である。

「知ることは言語を言語に関係付けることである。語と物との画一的な平原を復元することである。それはあらゆるものを語らせること、言い換えればあらゆる標識の上に註釈という第二の言説を生じさせることにほかならない。」

(同書)

化石段階での恐竜と言葉との関係は一体であり、恐竜の痕跡である化石はそれ自身の中に言葉を含んでいる。古生物学者は化石の中に刻印されている太古の時代の言葉を解読して、その言葉を世界の中へと積分すればいいのである。語と語を結びつけるのは、それらの語の集積を含んでいる世界であり、人間は恐竜に対してはまだ主体ではないが故に、世界によるセンテンスの構成に従うしかない。

(3) パーク段階

インゼン社の社長であるジョン・ハモンドは、ジュラ紀に生きていた蚊の化石から恐竜の遺伝子を取り出して、それからの恐竜のクローン化に成功して、コスタリカ近くの南洋の島に巨大な恐竜のテーマパーク、すなわちジュラシック・パークを作る。古生物学者であるアラン・グランドと古植物学者であるエリー・サトラー、それに数学者のイアン・マルカムはそこに招かれる。彼等は生きた恐竜を目の当たりにして驚く。

ジョン・ハモンドによるジュラシック・パークの建設によって、太古の動物である恐竜が復活した段階は、フーコーの『言葉と物』に述べられている三つの時代区分のどれにも当てはまらない。厳密に言えば、既に分析した化石段階

も、フーコーのいう三つの時代のどれかに当てはまる訳ではないが、強いていえばルネサンスに近い。しかしこれから分析しようとしている第二段階も第三段階も、フーコーのいう三つの時代のどれにも当てはまらない。ただここではフーコーの、時代を浮き彫りにする手法を借りるだけである。

この段階で、人間は生きた恐竜に出会う。既に述べた化石段階においては、人間は恐竜の化石に基づく言葉を通してしか恐竜に接していない。ここでのフーコーのいう区分では人間は恐竜に対してまだ主体ではない。彼等は彼等の世界によって、彼等の世界の中に形成された恐竜についての言葉の集積にのみ接するだけである。ところがパーク段階では、人間は復活した生きた恐竜に接する訳であり、そのことによって人間は始めて恐竜に対して個別の人間、つまり主体としての人間になる。アラン・グランドやエリー・サトラールは生きた恐竜を見て驚くが、その驚きは個別の人間としての驚きである。彼等は自分の目で恐竜を見、自分の手で恐竜の肌触りを感じる。そのことによって人間は恐竜に対して始めて個別の主体となる。すなわちアラン・グランドやエリー・サトラール達は生きた恐竜を古生物学者としての眼で見、古生物学者としての興味を抱く。またシステム・エンジニアであるデニス・ネドリールは恐竜の胚を売って金儲けしようとして、悲惨な最期を遂げる（このことに関しては後で詳述する）。また続編の「ロストワールド」では、生きた恐竜を捕獲して、それを見せ物にして、金を儲けようとする人間達が登場する。そのように、生きた恐竜に面した人間達は個別的存在として、あるいは主体として恐竜に面する。彼等は最早空想好きの少年達のように、恐竜について書かれた書物を読んで、太古の世界に思いを馳せるようなことはしない。世界と一体である言葉で描かれた恐竜は、それらが世界と一体であるが故に、世界によって結びつけられた言葉の連なりの中に出ることはない。つまり世界との間に何らかのズレを生じることはない。それらへと関わる空想好きの少年達は、世界によって紡がれた恐竜についての言葉の連関を解釈することによって、太古の世界を頭の中に描くだけで満足する。彼等は、恐竜が単なる言葉の連なりの中に封じ込められているが故に、それらに対する個別の主体であることは出来ない。言葉を読解する主体は個別の主体

であるよりも普遍的主体である。言葉から読みとる意味は自他に共通であり、それに基づいて思い描く空想の世界もだいたい共通である。各々の語が指示する対象が存在しない限り、言葉の読解者達は、言葉の意味を理解して、それに基づいて空想の世界を頭の中に思い描くしかない。言葉の意味はそれを読解する主体達にとって共通であり、それは彼等の存在を貫いて世界の地平へと広がる。

それに対して生きた恐竜に面してそれらと関わる人間達は、恐竜に対する個別的主体として恐竜に関わるのであり、ここに恐竜に対する個別の実存としての人間が成立するの。彼等はそれぞれの思惑を抱いて恐竜に面する主体である。

そうした個別的主体としての人間達が関わる恐竜は、言葉の中に封じ込められた言葉の連鎖としての恐竜と違って、世界と一体ではない。生きた恐竜は最早世界の中に収まってはいない。つまり彼等恐竜達は言葉の連なりによって形成された表象の集まり（指示されたものの集まり）ではないが故に、世界の中に静かに収まっている訳ではない。恐竜達は世界という封印を解いたのである。そのことによって恐竜は世界との間にズレを生じさせる。

例えば恐竜は冷血動物であるのか、温血動物であるのかといった、古生物学会で議論したり、それらについて論文を執筆したりしている古生物学という学問領域は、もし恐竜のクローン化が為されれば終焉を遂げるであろうとアラン・グラントは思っていた。そうしたことがこれ程早く到来したことにグラントは言葉を失う（これはマイクル・クライトンの原作による）。

すなわち言葉によって記述されていた恐竜のクローン化が実現して、生きた恐竜が出現することによって、それまで言葉の中に、あるいは世界の中に封印されていた恐竜が言葉の封印を破って実在することになると、恐竜に関するあらゆる記述は意味を失う。そしてそのことによって生きた恐竜は言葉によって記述された恐竜との間に、つまり世界と一体であった恐竜との間にズレを生ぜしめる。生きた恐竜は、最早言葉によって記述された恐竜から自らを解き放って、世界の中にその存在の場を得るのである。

そのことによって、言葉と物とが分離するという事態が生じる。つまりそれ

までは恐竜や太古の世界を記述する言葉は、それらが指示する実在的对象を持たないが故に、言葉の一つ一つは自足した内部空間、つまり言葉だけの空間を形成していた。その内部空間においては、恐竜は即言葉であり、それ以外のものではなかった。言葉が作る内部空間は、言葉が分泌する言語的意味によって満たされていて、その言語的意味が恐竜を表現していた。

ところが恐竜達がそうした言葉による封印を破って実在することは、言葉と物とが分離することを意味する。フーコーは古典主義時代の劈頭に出現したセルバンテスの『ドン・キホーテ』が言葉と物の分離を表現しているという。

「家畜の群れ、女中、旅籠屋は、それらがごくわずかでも城、貴婦人、軍勢に似ている限り、再び書物の言語となる。この類似は常に幻滅に終わる。求めていた証拠は物笑いのたねとなり、書物の言葉はいつまでも満たされぬままである。

『ドン・キホーテ』は、ルネサンス世界の陰画を描いている。書かれたものは、最早そのまま世界という散文ではない。類似と記号とのあの古い相合は解消した。」〈同書〉

ドン・キホーテが家畜の群れを軍勢と見誤り、女中を貴婦人と見誤り、旅籠屋を城と見誤るということは、彼が生きていたルネサンスの時代における言葉と物とが一致していた世界が崩壊したことの隠喩である。彼は言葉と物とが一致していた時代が崩壊し始める時代の端緒に生きたのであり、彼の行動自体がそのことを象徴しているとフーコーはいう。フーコーのいう古典主義時代と、我々が分析している、恐竜が復活した段階を同一視することは勿論出来ないが、言葉と物との、つまり恐竜についての言葉と恐竜との一致が、恐竜の復活によって崩れたという事態は、フーコーの分析した古典主義時代と類似している。

言葉と物との分離、つまり恐竜についての言葉と恐竜それ自身との間に分離が生じ、言葉は「『表象する』こと、すなわち《名指す》こと (nommer)」(同書)となる。言葉はそれ自身へと屈折して、つまり言葉それ自身を指示することによって、言葉のみによって造られた世界、つまり虚構の世界を構成するとを止め、実在する対象としての恐竜を指示する。そのようにして言葉と物、つまり

恐竜についての言葉と恐竜とが分離することによって、恐竜は言葉が形成する空間から解放されて、あるいは恐竜についての言葉を包み込む世界から切り離されて、言葉とは独立に世界の中に存在の場を得ようになる。恐竜についての言葉は、恐竜から切り離されて、恐竜という実在者を表象する役割を果たす。つまり指示するようになる。言葉はソシュールのいう能記（signifiant意味を指し示すこと）と所記（signifie指し示された物）へと分離することによって、言葉によって指示されるものである恐竜は、人間にとって表象の対象になる。恐竜が、恐竜の復活によって生れた個別の人間の様々な思惑の対象になるのは、それが言葉の表象作用の対象になったからである。つまり恐竜が言葉が形成する虚構の空間から解放されることによって、言葉との一体化の状態から分離し、言葉による表象の対象になったが故に、様々な人間の思惑の対象になったのである。恐竜に対する個別の人間は、人間が自由に操る言葉が言葉から分離したもとしての恐竜を表象することによって生れたのである。つまり恐竜についての言葉は恐竜を包み込むことによって凝固したことを止めて、恐竜を世界へと解放したが故に、言葉は人間によって人間に取り戻されたのである。すなわち恐竜を指示する言葉は恐竜との一体化の状態から人間に取り戻されることによって、人間はそれぞれが恐竜を言葉によって名指す、言葉を操る主体であることを自らに取り戻したが故に、恐竜に対する個別的主体となったのである。つまり人間はそれぞれが自らの存在に属するものとしての言葉を獲得したのであり、それ故にそれぞれが自己の主体性において、恐竜を言葉によって名指すこと、つまり指示することが可能になったのである。そしてそれ故に、人間は恐竜に対して互いに分離した個別的な実存を確保したのである。言葉が物としての恐竜から分離して、人間がそれを自由に操り、人間がそれぞれ言葉によって恐竜を指示することが可能になったが故に、恐竜に対する個別的主体としての人間が生じたのである。

巨大なテーマパーク「ジュラシック・パーク」はそのようにして出来たのである。そこでは人間は恐竜に対して神の如き存在である。人間は恐竜をクローン化という方法で創造し、「ジュラシック・パーク」自体が主体としての人間が

恐竜に対して君臨するような構造になっている。人間はそこで恐竜を造り、餌を与え、そして観客を呼んで、恐竜を見せ物にする予定であった。「ジュラシック・パーク」は恐竜の対象化、言葉による表象の結果出来上がった、構造化された恐竜への指示機能を有している。つまり恐竜の対象化の極限に「ジュラシック・パーク」がある。「ジュラシック・パーク」のあちこちに一万ボルトの高圧線が張り巡らされており、各々の恐竜は自由にパークの中を動くことが出来ず、それ故に草食の恐竜が肉食恐竜によって食べられることもなく、なによりも人間の安全がそのことによって保証されている。それ故に、人間は動物園で動物を見るように、またはサファリパークで動物を見るように、安全が保証された中で太古に滅んだはずの恐竜を見ることが出来たはずであった。

恐竜についての言葉による指示機能、表象作用のシステム化が「ジュラシック・パーク」であり、恐竜はそこでは特定の場所に閉じこめられ、そのことによって人間は恐竜が存在している世界の外にいて、そこから恐竜を眺めているはずであった。

『「ここは動物公園ですからね。いろいろなエリアのツアーを用意するわけですが、それをアトラクションと呼んでいるんです。それだけのことですよ』

グラントは洪面を作った。またしても不快感がこみあげてきた。恐竜をアミューズメント・パークの見せものにするなんて、がまんがならない。」(マイクル・クライトン著 酒井昭伸訳『ジュラシック・パーク』)

「ジュラシック・パーク」は現代科学技術の粋を集めて恐竜を管理している。そこでは恐竜の増殖までもが管理されている。

『「ほとんどの恐竜は卵菌を持って生れてくるんです。卵菌というのは、サイのツノのように鼻先に生えた小さな突起で、卵の殻を割るのに使われます。ところがラプトルはそうじゃない。このとがった鼻づらで卵殻に穴をあけるんです。そこから先は、新生児室のスタッフが手を貸してやらなくてはなりません』

『手を貸してやるという一』グラントがかぶりをふりながら、『野生の状態ではどうなるんだろう?』

『野生?』

『野生で生れるときだよ。自然のなかで巣を造った場合さ』

『ああ、それはありえません』とウーは答えた。『わたしどもの恐竜は、卵を埋産めないんです。だからこそ、この新生児室があるわけですよ。当〈恐竜王国〉の恐竜供給源は、ここにしかありません』

『どうして卵を産めないんだい?』

『それはですね、こういう場所ですから、恐竜に卵をどんどん産まれてはこまるわけですよ。危険なものをあつかう以上、必ず二重三重の安全システムを用意するのがふつうです。恐竜の管理については、なにごとにつけ、すくなくとも二重の予防策を用意してありますね。産卵の抑制にしても、やはり二重の措置を講じてあります。第一の対策としては、恐竜を不妊にしてあることがそうです。X線を照射してあるんですよ』(同書)

このようにして「ジュラシック・パーク」では恐竜が徹底的に管理されている。それはつまり恐竜の徹底的な対象化の一つの証であり、それは既に述べたように、言葉による恐竜の表象、指示の延長に他ならない。そこでは人間は安全を保証された場所から、徹底的に対象化された恐竜を管理し、眺めることが出来るはずであった。

それはあたかもフーコーが古典主義時代の作品の代表の一つとして挙げている、サドの『ジュスティーン』の如きである。フーコーは次のように述べている。

「欲望の暗い反復的暴力が表象の限界に押し寄せているのだ。『ジュスティーン』は『ドン・キホーテ』の第二部に照応するであろう。その深い存在において表象であるドン・キホーテ自身が、みずからの意志に反してその表象の対象であるように、ジュスティーンは、まさに彼女自身がその純然たる起源にほかならない欲望の、際限のない対象なのである。ジュスティーンにおいて、欲望と表象とは、女主人公を欲望の対象として表象する〈他者〉の現前によって結びつくのにすぎず、彼女自身は、表象という、軽く遠く外的で冷たい形でしか欲望というものを知らない。これが彼女の不幸である。つまり、欲望と表象とのあいだに、彼女の天真爛漫さがつねに第三者として介在しているのだ。」(フー

コー著 渡辺一民 佐々木明 訳『言葉と物』)

ジュスティヌが、彼女を取り巻くいがわしい人間達の欲望の対象であることを、そうしたいいがわしい他者の彼女への欲望を通してしか知らない。つまり自らがそれらの人々によって対象化されていることを直接的には知らないのであり、そこにジュスティヌの不幸があるとフーコーはいう。しかし「ジュラシック・パーク」の中の恐竜達は、彼等が人間達によって対象化され、現代科学技術によって管理されていることを、つまり自分達が言葉を媒介とした表象の徹底的な対象であることを全く知らない。その全く知らないというところに恐竜達の強さがある。ドン・キホーテもジュスティヌも、自分達が他者の表象の対象であることを、彼等なりに、彼女なりに知っていた。しかし恐竜達は表象化することも、されることも知らないが故に、人間達に逆襲することが出来た。

(4) 主客逆転のきっかけとしての胚の売買

システム・エンジニアのデニス・ネドリーは、「ジュラシック・パーク」にある恐竜の胚を盗んで、遺伝学者のルイス・ドジスンに売るために「ジュラシック・パーク」を管理している全てのコンピュータを停止させ、セキュリティ・システムを解除させた。そのために恐竜達はパーク内の何処にでも移動出来るようになる。これが人間と恐竜との主客逆転のきっかけになる。ネドリーは盗んだ胚を渡すために、港へ急ぐ途中で恐竜に襲われて悲惨な死を遂げる。

このネドリーの行為、つまり恐竜の胚を売ることによって金儲けをしようとする行為は何を意味するであろう。インゼン社の社長であるジョン・ハモンドが造った「ジュラシック・パーク」は、観客を集めて生きた恐竜を見せて、利益を得るために、つまり南洋の小島に市場を形成するためである。その意味ではネドリーの行為は、ハモンドの行為の延長線上にあるといえる。すなわち市場とは貨幣という、商品の価値を客観的に規定する基準によって商品の価値を決める場であるといえる。そのようにして貨幣で商品の価値を決定するという

ことは、今まで述べた一連の対象化の一種のヴァレエーションに他ならない。

「表象一般の領域において、表象に代置されてそれを分析する記号がそれ自体表象でなければならないのと同じく、貨幣が富の記号でありうるためには、貨幣自体が富でなければならない。ただ、表象はまず表象されてから記号となるのに対して、貨幣が富となるのはそれが記号だからである。」(同書)

貨幣は商品を表象することによって、つまり記号であることによって初めて富となるのであり、つまり商品を表象することによって貨幣なのである。それ故に貨幣は、言葉が何かを表象することによってそれを対象化すると同様に、商品を対象化する。それ故に、ハモンドもネドリーも基本的には同じことを為しているのである。つまり恐竜を市場という、貨幣によって開かれた空間において対象化すること、つまり商品化することを為しているのである。すなわち恐竜という商品によって富を得ることを目指している。

ただネドリーの行為、つまり恐竜の胚を秘密裏に売り飛ばすことによって利益を得ようとする行為は、いわばハモンドが道筋を付けた路線に乗った行為である。つまりネドリーは恐竜のクーロン化を為すことによって、恐竜を言葉から分離させ、言葉の表象化作用の対象にするというハモンドの行為に依存した行為を為そうとしたのである。

しかしネドリーのそうした行為は、結果的には恐竜の対象化、商品化を為すというハモンドの試みを破壊する行為になった。ネドリーは、恐竜を対象化する巨大な装置である「ジュラシック・パーク」の管理機能を解除することによって、恐竜を野放しにする。

それではどうしてネドリーのそうした行為は失敗に終わったのであろうか。既に述べたように、恐竜の復活によって、恐竜に関わる人間は個別的的存在になった。それぞれが言葉の楔から解放された恐竜に対して個別的、主体的に関わることが可能になったのである。そのような状況の下で、ネドリーは恐竜に対して、その胚を売り飛ばすことによって利益を得ようとするようなかたちで関わる。しかしネドリーの行為は、恐竜を対象化する巨大な装置から切り離された行為として位置づけられる。「ジュラシック・パーク」は恐竜を徹底的に管

理するというかたちで、恐竜を対象化しようとする。いいかえればそれらを商品化しようとする。ネドリーの行為は、先に述べたように、そのようなことに基づいた行為であるが、あるいはそうした行為の延長線上にある行為であるが、「ジュラシック・パーク」全体の目論見、つまり恐竜を大規模なかたちで対象化し、管理するという目論見、意図から逸脱した行為であるといえる。そのことは既に述べたように、「ジュラシック・パーク」はクローン化というかたちで復活した恐竜へと個別的主体として関わりうる人間を生み出したが故に、ネドリーのような行為を可能にしたのである。

ネドリーの行為が「ジュラシック・パーク」全体の目論見から逸脱した行為であると述べたが、それではどのような意味においてそうなのであろうか。「ジュラシック・パーク」は一種のシステムである。それはシステムティックに恐竜を生み出し、増殖させ、管理している。つまりシステムティックに恐竜を言葉から切り離し、対象化し、商品化しようとしている。そこにはそうしたシステムを創造したハモンドの意志の反映があるが、しかしそうしたシステムの中において、各々が個別の人間として恐竜に関わっているのである。逆説的ではあるが、そうしたシステムが恐竜に対する個別的な人間を生み出したのである。それに対してネドリーの行為は、ハモンドが創造した恐竜を対象化するシステムに乗った行為ではあるが、その目的はハモンドの意図に反する行為である。

ネドリーの行為は、ハモンドのインゼン社とは商売敵のバイオシン・コーポレーションに属するルイス・ドジスンに恐竜の胚を売り渡すことによって、巨額の金を得ようとする行為である。ドジスンはネドリーから購入する恐竜の胚から恐竜のクローンを作り出して、第二の「ジュラシック・パーク」を造ろうとしているのである。そうした行為を為すということ自体が「ジュラシック・パーク」に反する行為である。ネドリーの行為はそれ故に、個別的行為ではあるが、それは「ジュラシック・パーク」というシステムから逸脱した行為である。既に述べたように、貨幣を媒介とした商品の売買を可能にするのは、相互的な承認が在って初めて成立するのであるが、この場合には、ネドリーが売る

うとした恐竜の胚の所有者であるハモンドの承認なしに為されようとした行為であるが故に、正当な売買であるとはいえない。それ故にネドリーの行為はシステムから逸脱した行為であるといえる。それ故にネドリーの逸脱行為は「ジュラシック・パーク」の管理システムをストップさせることによって象徴される。

(5) 主客逆転による恐竜の人間への逆襲

ネドリーによる、恐竜を管理するセキュリティ・システムの解除によって、肉食恐竜達は人間を襲い始める。この映画の大部分を占める「主客逆転段階」がこの映画の中心になる。すなわち人間と恐竜との間の主客逆転が生ずる。

既に述べたように、パーク内では人間が恐竜の上に君臨して、全ての恐竜を管理しているはずであった。ところが先に述べたネドリーの行為によって、恐竜達は管理システムから解放され、自分達を支配し、君臨しているはずであった人間達を襲撃して、それを食料にしようとする。この主客逆転にはどのような意味があるのであろうか。

すでに述べたように、人間達は恐竜の遺伝子を手に入れて、そのクローンを造ることによって、恐竜を言葉の中への封印から解放させたのであるが、そのことによって恐竜達を言葉の表象作用の対象にし、かつそこに市場を形成することによって恐竜達を商品化しようとする。そうした人間達による恐竜の支配、管理は、ネドリーによる管理システムの解除によって終焉を遂げる。世界は変わったのである。

コスタリカ沖のイスラ・ヌブラルという恐竜を復活させた小島は、恐竜に対する管理体制が盤石であったはずであるが、ネドリーの逸脱行為によって、その管理体制は崩れ、恐竜は野放しになる。「ジュラシック・パーク」という人為的に造られた世界は変容したのである。既に述べたように、恐竜をクローン化によって復活させることによって、恐竜は言葉の封印から解き放たれ、それらは言葉から分離し、言葉の表象の対象となる。そしてそのことは、恐竜達が人間の管理体制の中に入ることを意味する。ところが、恐竜を管理する体制が崩

れることによって、「ジュラシック・パーク」という人為的世界は変容する。それまで恐竜を指示し、表象していた言葉は、最早恐竜それ自身を表象せずに、人間達が恐竜達の対象に、つまり恐竜達の餌になる可能性を開くように世界が変容したが故に、そのことによる人間の恐怖を、恐竜に襲われるかも知れないという恐怖を表象するようになる。すなわち恐竜は即人間にとって恐怖の対象になったのである。そのことは、恐竜に対する主体としての人間の終焉を意味する。恐竜は最早人間にとって表象の対象ではなく、自分達を襲い、餌にしうる主体となったのである。すなわち恐竜達は恐怖の源泉になったのである。

恐竜を恐怖の対象として表象する言葉は、恐竜をそのように指示し、表象するだけでなく、それらの言葉は屈折して人間達の恐怖を指示する。つまりそれらの言葉は恐竜に対する恐怖という人間の内面を指示する。人間の恐怖の由来は恐竜であり、それ故に恐竜を指示する言葉は恐竜に対する恐怖という人間の内面へと帰還する。

そしてさらに恐竜達を指示し、表象する言葉は、人間達の世界を、つまり恐竜に襲われる可能性のある「ジュラシック・パーク」という世界を恐怖の空間として表象する。恐竜達を指示する言葉は、恐竜達から人間達の内面性へと帰還し、人間達の内面性の恐怖を指示する。つまり解き放たれた恐竜達を指示する言葉は、それと共に恐竜達に恐怖を感じる人間の内面性をも指示する。さらにそれらの言葉は彼等が居る世界、すなわち「ジュラシック・パーク」という世界へと反映して、その世界を恐怖の空間として意味付けする。恐竜への恐怖という人間達の内面性を指示する言葉は、人間の内面性から再び彼等が居る世界へと反映する。「ジュラシック・パーク」という世界は最早人間達が恐竜達の上に君臨し、支配する世界ではなくなったのであり、そうした世界の変容が言葉の有する指示機能、表象作用を変化させる。「ジュラシック・パーク」という世界は、恐竜達が跳梁跋扈する世界であり、最早人間はそこでは恐竜達を管理し、支配する主体ではなくなり、恐竜達が人間達に対して主体となったのであるが、そうしたことは恐竜達が自覚的に為したことなく、世界が変容したからなのであり、「ジュラシック・パーク」という世界の構造が変化したが故で

ある。「化石段階」から「パーク段階」への変化も、「パーク段階」から「主客転倒段階」への変化も、世界の変容によって生じたのであり、人間が主体的に為したのではない。人間が為したことが連鎖的に世界へと波及することによって人間の意図に反して世界の構造が変化し、その世界の構造の変化が言葉の機能に変化をもたらしたのである。フーコーによれば言葉の機能は主体としての人間の主体的行為に基づくのではなくて、それは世界の構造に基づくのであり、フーコーの用語を用いるならば、「エピステーメー」に基づくのである。

人間達にとって、「ジュラシック・パーク」という世界は最早自分達が恐竜達に対して優位な立場に立って支配する世界ではなくなってしまったのであり、それは恐怖に満ちた空間へと変貌した世界になったのである。それ故にそこにおける恐竜という言葉の作用は、恐竜を指示することによって、恐竜達を対象となす世界ではなくなり、恐竜がこの世界を支配する世界になったが故に、人間の内面性へと帰還し、恐怖という人間の内面性を指示する。そしてそれらの言葉は、人間達が存在の場を得ている世界を恐怖に満ちた世界として指示する。

そうしたことを象徴する場面が、ツアーに出かけたアランとマルカム、それにジロネナーロ、ハモンドの孫のティムとマーフィーらが、ネドリーによって電気を切られたために、動かない車の中で待機している時に、巨大な恐竜の足音が聞こえてきて、二人の子どもがおびえる場面である。普段の生活の中で、そうした足音におびえることはない。ハモンドの二人の孫がそうした足音に怯えるのは、ティラノサウルスという言葉（彼等がいた地域はティラノサウルスの地域であった）が、彼等に恐怖心呼び起こし、その足音が、彼等がいる場所がティラノサウルスの地域であることを呼び起こしたからである。すなわち、ティラノサウルスという言葉は、かつての化石段階においては、太古の時代に地球上に君臨した最強の肉食恐竜であったという太古の世界への創造力を呼び起こさせる言葉でしかなかったのであるが、ティラノサウルスが復活した今、そしてそれが野放しにされた今、それは自分達を襲う現実的可能性を持つ主体であるが故に、彼等にとってそれは恐怖を呼び起こす源泉以外の何ものでもなかったのである。そしてその恐怖心は、彼等がその時居た場所はティラノサウルスが

何時自分達を襲って来るか知れない恐怖の空間であるというように、彼等のいる世界を意味付けする。現にティラノサウルスは彼等を襲い、弁護士のジェナーロはティラノサウルスの犠牲になる。

「パーク段階」において恐竜を指示する言葉と物としての恐竜とが分離して、恐竜達は言葉による表象の対象であった。彼等は人間によって管理され、まなざしを向けられる対象でしかなかった。そうした両者の関係の変貌は、「ジュラシック・パーク」という世界の構造の変化による。恐竜は人間による管理体制の崩壊と共に野放しにされ、世界の主体は人間から恐竜に変わる。そのことによって言葉は世界へと戻る。かつては人間が操っていた言葉は世界の変容と共に、すなわち主体としての人間の終焉と共に、人間の手を放れて世界へと戻った。すなわち恐竜についての言葉が人間の恐怖心を指示し、また恐怖の空間としての世界を指示することは、主体としての人間が為しているのではなくて、変容した世界が為しているのである。「ティラノサウルスは怖い」「ティラノサウルスが襲って来る」という言葉における主語と述語とを結びつけるのは世界であり、人間ではない。「怖い」とか「襲って来る」という述語を主語に結びつけるのは世界である。つまりティラノサウルスという言葉人間にとって単なる対象ではなくて、あるいはその上に君臨する客体ではなくて、人間を襲いうる、人間にとっての主体としたのは世界であり、世界の構造の変化である。世界が恐怖に満ちた空間となったのは、世界そのものにおいてであり、つまり世界の変貌によってであり、人間はそのきっかけを作ったに過ぎないのである。それ故に、「ティラノサウルス」という主語に「怖い」「襲って来る」という述語とを結びつけるのは、ティラノサウルスが人間に対する主体として、言葉が指示する方向を逆転させた世界である。それは先の例で述べた、アナウンサーが語る言説が、世界において起きる出来事によって規定され、その主語と述語が世界によって結びつけられるということと同じである。人間はこの世界では最早主体ではなくて、言葉は人間の手から離れ、世界へと戻ったのである。しかし言葉はかつての化石段階のように、世界と一体となって、恐竜をその中に封じ込めたのではない。恐竜はこの世界での主体であり、それは言葉から解放

されたままである。言葉は化石段階のように、恐竜をその中に封印することはない。何故ならば、この主客逆転段階においては、恐竜は生きているのであり、むしろ人間からその主体性を剥奪して生きているのである。

それ故に、言葉は恐竜を封印することなく、恐竜はこの世界での主体となったのであり、その主体としての恐竜の、世界の中での跳梁跋扈のために、言葉は主体性を奪われた人間から離れ、恐竜を封印することなく、世界と一体となっているのである。世界は、人間の手から離れた言葉を相互に結びつけ、世界自らが世界を規定するのである。言葉は主体性を恐竜に奪われた人間の手にではなくて、その構造を変容させた世界の中にあるのである。

ティラノサウルスに襲われたハモンドの孫に、「動くな、動くと襲って来る」とグラントがいう台詞は、世界がグラントに言わしめているのである。つまりティムにそのようにいう言葉の述語（この場合は命令形だから述語しかないのであるが）は、世界による規定としての述語に他ならない。つまりティラノサウルスが野放しになって、世界の中を跳梁跋扈させているのは世界であり、また人間達から彼等の主体性を奪ったのも世界であるが故に、その言葉が帰属する先は世界である。言葉は世界から発して、世界へと戻るのである。つまり言葉は恐怖に満ちた世界にその由来を持ち、さらに言葉は世界を指示するのである。言葉は主体としての人間から発して、物としての恐竜を対象化する段階は終焉を遂げたのであり、言葉は人間の内面へと逆行し、また人間がその存在する場、空間を恐怖に満ちた空間として表象するのである。

先にフーコーの『言葉と物』で述べられているサドの『ジュステイーヌ』とセルバンテスの『ドン・キホーテ』を、「パーク段階」における恐竜が人間によって対象化されている例として挙げたが、恐竜は人間によって対象化されていることも、管理されていることも知らないが故に、恐竜達の強さがあると述べた。すなわち恐竜達は自己意識を持たないが故に、自分達が人間によって対象化されていることも管理されていることも知らないし、そうした自覚もない。それ故に、人間のようにそうしたことを引きずっていない。恐竜達は人間達と違って、その行動形態は単純素朴である。そのことが恐竜達の強さなのである。

第三段階の「主客逆転段階」において、人間はそれまでの恐竜の立場にいることになるわけだが、人間達を取り巻く状況はそれまでの恐竜達が置かれていた状況よりも過酷である。恐竜達は人間によって対象化され、管理されていたのであるが、それ故に恐竜達の生命は保証されていた。草食恐竜も肉食恐竜の餌になることはなかった。ところが、人間がそれまでの恐竜の立場に置かれた場合、恐竜は容赦なく人間達を襲って来る。しかも人間達はそのことについての自覚を持っている。つまり人間達が恐竜達によって対象化されているという自覚を持つのは、人間達が自らの置かれている世界を恐怖に満ちた世界として表象することが、つまり野放しにされた恐竜達に囲まれている世界の中にいるという自覚が、自分自身へと跳ね返って来るが故でなのである。恐竜についての言葉が世界を経由して自分達の立場へと帰還するのである。それ故に、人間達が自らを恐竜達によって対象化されていると思うのは、人間達自身が自らをそのように規定するが故である。

サドの『ジュスティーン』の女主人公であるジュスティーンが他者の表象の対象であり、そのことを通してしか自分が他者の欲望の対象であることを知らないに対して、「ジュラシック・パーク」の人間達は、自分達が自分達を恐竜達の欲望の対象であると規定している。恐竜達は人間達を表象しないし、対象化することもない。人間達が自らを表象することにより、その表象の空間の中に自らを閉じこめているのである。

(6) ベラスケスの「侍女たち」を通した分析

フーコーは『言葉と物』の冒頭でベラスケスの代表的絵画「侍女たち」の分析を通して古典主義時代の特徴を明らかにしている。フーコーによるベラスケスの「侍女たち」という絵画の分析は以下の通りである。

この「侍女たち」はベラスケスが絵を描いている場面を描いた絵である。左に立てかけられた画布が描かれ、その横にパレットと絵筆を持ったベラスケスと思われる画家が立っていて、そして中央にはマルガリータと思われる高貴な

身分の少女が立っており、侍女と小人に付き添われている。さらに画面の右手前には犬がいる。ベラスケスが描いているのは、スペイン国王のフェリペ四世と王妃のマリアーナである。

「そこでは、表象がその諸契機それぞれにおいて表象されているわけであって、その場合の諸契機とは、画家であり、パレットであり、裏返しにされた画布の大きなくすんだ表面であり、壁にかけられていたいくつもの絵であり、自ら眺めているながら自分達を眺めている人々によって額縁にはめこまれている人物達であり、最後に、表象関係の中央、その中心で、本質的なもののもっとも近くにある一しかも、表象のもっともはかない二重化にすぎなくなるほど、はるかに遠く、非実在の空間の奥深く差し込まれ、よそに向けられているあらゆる視線とは無縁な、反映として一表象されているものを示す鏡にほかならない。絵の内部のあらゆる線、とりわけ中心にあるその反映からくる線は、表象されつつ不在であるものそのものを目指している。それは客体であり一表象された芸術家が画布のうえに写しつつあるものであるから一同時に主体である一画家が自身をその制作をつうじて表象しながら見ていたのは、画家自身にほかならず、絵に描かれている視線は、王というあの虚構の点に向けられているが現実にはそこに画家がおり、画家と至上のものが瞬く間にいわば際限もなく交代していくこの両義的场所の主人こそ、最終的には、その視線が絵をひとつの客体に、あの本質的欠如の純粹な表象にと変形してゆく、鑑賞者にほかならないからだ。」(フーコー『言葉と物』)

すなわちこの絵を秩序付けているもの、絵の中においては不在であるが、本来絵の中心であるはずの人物とは、絵の中央にある鏡に写っている王とその后であるが、それは同時に画家であるベラスケスでもある。両者は瞬く間に入れ替わり得るのである。

このフーコーによるベラスケスの絵の分析を、我々の今までの「ジュラシック・パーク」についての分析に当てはめるとどのようになるであろうか。

我々は映画「ジュラシック・パーク」を三段階に分けたのであるが、この絵を手掛かりにして、映画を分析出来るのは、第二段階の「パーク段階」と第三

段階の「主客逆転段階」である。まず第二段階の「パーク段階」の場合では、この絵に描かれている人々を秩序付けているが、この絵の中では不在である者は人間である。すなわち第二段階において、世界の外に身を置いて君臨しているのは人間であり、そして絵の中で描かれているのは、恐竜達であるということになる。恐竜達は人間達が作った表象の空間の中に閉じこめられて、管理されているのであり、つまり言葉によって対象化されている。人間達はその表象の空間の外に居て、恐竜達の上に君臨しているのである。その場合、人間と恐竜との関係はあくまでも外的であり、恐竜達は自分達が人間によって管理されていることについて、あるいは自分達の出生の由来について知らない。人間達は恐竜達と、特に肉食恐竜達と直接関わらず、彼等の管理を「ジュラシック・パーク」を管理しているシステムに任せている。人間達はあくまで恐竜達のいる世界の外にいるのである。

しかしフーコーもいっているように、そのようにして世界の外から世界の秩序を維持している、いわば世界に対して超越的な支配者は瞬時に入れ替わり得ることが出来る。第二段階において、人間が占めていたそうした超越的な場は第三段階では、恐竜達によって占められる。そして人間達はそれまで恐竜達が占めていた場、つまり支配される者達が占める場へと移行しなければならない。しかし恐竜達は人間のように自分達が支配の場に居ることを自覚していないが故に、ベラスケスの絵におけるように恐竜達が自分達の立場をそのように位置付けることはない。もしフーコーの分析のように、この絵の外側から絵の中の人物達を秩序付けることを表象する者がいるとしたら、それは人間にほかならない。つまり絵の中の支配される者の立場に自分達を位置付けながら、同時に支配する者の立場をも表象するのは人間にほかならないであろう。つまり人間は被支配者であると共に、支配者の立場をも表象するのである。すなわち人間は表象の空間の中に身を置きながら、外から自分達が産出した表象の空間の構造を眺めることが出来るのである。

(7) 時間性について

映画「ジュラシック・パーク」の時間性は奇妙な構造を持つてゐる。それは今までの分析で使用した三段階とは全く別の構造である。すなわちこの映画は主人公であるグラントの視点とそれ以外の視点とが錯綜しながら、時間の流れを形成している。最初の場面は「ジュラシック・パーク」が作られる予定のコスタリカ沖の島、イスラ・ヌブラルで、嵐の中に大勢の人達が恐竜を檻から出す作業を行なっている。その作業員の一人が一匹の恐竜に檻の中に引きずり込まれて死ぬ。これはグラントとサトラーが「ジュラシック・パーク」へと招かれる伏線になっている。それから弁護士とインゼン社の社員がドミニカ共和国で、その作業員の死亡事件によって生じた投資家達の心配を和らげるために、古生物学者のグラントと古植物学者のサドラーを呼ばなければならないとの相談をしている場面が描かれている。そしてアメリカのモンタナ州のスネークウォーターの近くで、グラントとサドラーが恐竜の化石を発掘している所に、ハモンドが来て、二人にパークの査察のために、イスラ・ヌブラルに来るように要請する場面が続く。さらにコスタリカのサンホセで、ネドリーとドジスンが恐竜の胚を盗み出す相談をする場面が描かれている。

これらの場面は全体の序章的な場面であり、後に生ずるこの映画の主要な場面を形成するための伏線である。この序章的な幾つかの場面は、それぞれ違った視点から描かれている。それはこれらの場面が全体の舞台作りの役割を果たしているが故であり、それらは「ジュラシック・パーク」の崩壊による恐竜の人間への襲撃という、この映画のクライマックスへと収斂するために用意されている。

その後グラントやサドラー、それに数学者のマルコム達はその島へ行く場面が続き、物語の佳境に入る。島に着いた彼等は生きた恐竜達を見て驚く。そしてハモンドが建設したヴィジター・センターに行き、そこでハモンドが雇っている研究者達がどのようにして、恐竜達を復活させたかについての説明を受ける。そしてハモンドが雇っている研究者達の仕事振りを見学する。このあたり

までは、既に述べた恐竜と人間の関与形式を三段階に分けた第二段階に当たる。

そして彼等はハモンドの二人の孫と一緒にツアーに出かける。途中で彼等は病のステゴサウルスに出会い、サトラーがステゴサウルスの面倒を見るためにそこに残り、一行とは別行動を取る。ここで視点は二つに分かれる。そして既に述べた、ティラノサウルスの地域で、ネドリーによってセキュリティ・システムが解除されたために、停止したままの車の中で一行が電気が復興するのを待っている時に、ティラノサウルスに襲われる。別の車に乗っていたハモンドの孫を救出するために、グラントはマルカムと別れる。

それから後、幾つかの視点の錯綜によって、恐怖の空間を描くことにより、この恐怖の空間、恐竜の支配する世界の恐怖を描いて行く。時間とは絶えざる差異化作用であるが、ここでは様々な恐竜の人間への襲撃を描くことによる、時間の差異化作用の積み重ねが、恐竜が支配する「ジュラシック・パーク」という恐怖の空間、恐怖の世界を畳みかけるように描いて行く。つまり恐竜の人間への襲撃という生起を描くことによって、彼等が置かれた恐怖の空間を開示して行く。すなわちスピルバーグは時間性を通して空間を開示するという手法を取っているように思われる。

そしてその恐怖の空間の開示は、幾つかの視点の錯綜によって為される。というのは、先に述べたように、主要な登場人物がこの空間の中で拡散しており、それ故に、別々の視点からこの恐怖に満ちた世界を描いて行き、それらの幾つかの視点は相互に錯綜する。グラントはハモンドの二人の孫と一緒に広いパーク内を彷徨う。サトラーはグラント達を探しに来くが、もう彼等は何処かに去ったので、マルカムと一緒にヴィジター・センターに戻り、ネドリーが解除したシステムを元に戻す努力をする。ヴィジター・センターの外にある機械室に行き、そこの電源のスイッチを入れなければならないため、サトラーは命がけでそこへ行き、スイッチを入れる。丁度その時に、グラント達は一万ボルトの電流が流れていたフェンスを超えようとする。危機一髪で、最後にフェンスを超えようとしていたハモンドの孫のティムは助かる。この場面はサトラーとグラント達の行為が錯綜する場面であり、互いに異なる場所から異なる視点で世

(178)

界を見ているために、相互の行為が見えないが故に、ティムの命が危険にさらされたのである。恐怖の空間はこのように違った視点の錯綜を介して、開示される。そして異なった視点はグラントへと収斂して行く。つまり複数の視点はグラントの視点へと重なり合う。今の例の場合も、サトラーの視点からの恐怖の空間の開示は、異なった場所にいるグラントの視点と錯綜する。そのように複数の視点から、つまり複数の角度からの恐怖の空間が開示されて行く。

時間性はそのように異なる視点からの恐怖の空間を眺望することを重層化させることにより、恐竜が支配する世界を観客に対して開示する。そしてそうした異なる視点は、グラント達がヴィジター・センターへと到着することにより重なり合う。

最後の山場はラプトルにハモンドの孫が襲われる場面である。厨房に逃げ込んだ二人の子供はラプトルから逃れて、サトラーとグラントと合流する。そしてヴィジター・センターをラプトルの襲撃から逃れるが、遂に四匹のラプトルに囲まれ、絶体絶命の危機に陥った時に、巨大なティラノサウルスがラプトルを攻撃し、その間に彼等は逃れて、島から脱出する。

このようにこの映画の時間性は、グラントの視点を中心にした異なる視点からの空間の開示により、恐怖の空間、恐竜によって支配されている世界を開示することによって、恐怖の世界を立体的に展開して行く。主人公のグラントの役割は、恐竜の支配から逃れるという問題の解決を為す主要な役割を演じているというよりも、複数の視点を常に収斂させる視点の中心としての役割を演じているといえる。つまり複数の視点の中心にグラントがいるのであり、それらの複数の視点はグラントの視点と錯綜し合いながら、最終的にグラントの視点と一致する。つまり幾つかの恐怖の空間を開示する視点はグラントを中心に展開される。フーコーのいう表象の空間は一挙に開かれるのではなくて、そうした複数の視点が時間性によって重層化することによって開かれるのである。



ベラスケス 『侍女たち』

(たけはら ひろし・委嘱研究員)

Using Philosophical Methods to Analyze Films

Hiroshi Takehara

This paper uses the ideas set out in Michel Foucault's *The Order of Things* (*Les Mots et les choses*), his study of the relationship between words and things, to attempt a philosophical analysis of Stephen's Spielberg's movie *Jurassic Park*. Foucault divided the relation between words and things into three stages. While adopting Foucault's overall analytical framework, the stages I employ do not precisely correspond to his.

What I call the "fossil" stage of the movie is that in which humans relate to dinosaurs *as fossils*. The "park" stage is that in which the industrialist Hammond has succeeded in bringing dinosaurs back to life. Finally, in what I call the "subject-object inversion" stage dinosaurs attack humans and the established order of the park collapses.

In the first stage, word and thing are one; the messages to be read from the fossil are the same as the words used to describe them; they do not indicate anything else.

In the second stage dinosaurs have been brought back to life and humans have come into contact with living dinosaurs. As a result, for the first time humans relate to the dinosaurs as individualized humans, that is, as human subjects.

Finally, in the third stage—what I call the "subject-object inversion" stage, the security system used to control the dinosaurs is disabled, and carnivorous dinosaurs begin to attack humans. At this point the words used to represent dinosaurs not only indicate and represent them as the object of fear but, in a refracted sense, the universal human experience of fear. *Jurassic Park* is no long a site of human management and control of dinosaurs, but of dinosaur predation upon humans.